

人は苦難に直面すると、自己防衛本能から無意識にその原因を外側に向けて責任を転嫁する傾向があります。

倫理運動の創始者である丸山敏雄は、『万人幸福の栞』第四条「万象我師」の一節で次のように述べています。

「今日までは、相手の人を直そうとした。鏡に向って、顔の墨をけすに、ガラスをふこうとしていたので、一こうにおちぬ。自分の顔をぬぐえばよい。人を改めさせよう、変えようとする前に、まず自ら改め、自分が変わればよい」

また、京セラの創業者・稲盛和夫氏は月刊誌『致知』の中で次のように述べています。

「現在が苦しければ苦しいほど、とかく人というものは愚痴や不平不満を鳴らしてしまうというものです。しかし、その愚痴や不平不満は、結局は自分自身に返ってきて、自分自身をさらに悪い境遇へと追いやってしまいうのが常であります」

これは、他責が問題をさらに悪化させる要因であることを示しています。

〈相手が悪い〉〈世の中がおかしい〉と責めても問題は一向に解決せず、不安が膨らみ、現状が悪化してしまうことがあります。そこから抜け出すためには、まず自分を顧みて、自分を変える実践に取り組むことが重要です。

介護福祉事業を営むM氏は、昨今の人材不足の影響を受けて、数十年ぶりに現場で仕事をするようになりました。

M氏は、利用者の女性・Aさんの担当に



責める心を顧みた時 解決の道が開かれる

なりましたが、Aさんは毎日のように罵声を浴びせたり、暴れたりする人でした。

次第にAさんへの不満が募り、仕事が辛くなっていきました。どうすればAさんに心を開いてもらえるかを考える中で、M氏は亡くなった母のことを思い出しました。

M氏は、様々な事情で母を看取ることができず、「寂しい思いを言葉にできなくて、辛かったのではないか」と、最後に母に寄り添えなかったことを後悔していました。

その気持ちを思い出したM氏は、〈Aさんも寂しさが態度に表われているのかもしれない〉と考え、母の姿を重ねました。そして、〈自分が母にできなかったことをAさんにさせていたどうか〉と心に決めました。

翌日から、M氏は母に接するように、穏やかな気持ちでAさんの介護に努めました。すると、徐々にAさんの態度も穏やかになっていったと言います。

丸山敏雄は、著書『歓喜の人生』の中で次のように語っています。

「事実、物そのもの、事そのことにあるのではない、実は自分の心の中にあるのである。(中略) 一歩退いてみよ。実は、あれがいけない、これが悪いと思ったその種子は、その人や物にあるのではなくて、自分にあるのだ」

人は目に見えない次元で繋がりを、関係しあって生活を営んでいます。それ故に、自分の心は相手や現状に反射投影します。困った時こそ、自分を顧みる「人は鏡」の実践に成長する道があるのです。